



映画雑感17

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

▼2022年1月から4月までに観た邦画から。3月に行われた米アカデミー賞授賞式で、日本の「ドライブ・マイ・カー」が国際長編映画賞を受賞しました。2008年の「おくりびと」以来13年ぶりの受賞です。同作品はカンヌ国際映画賞やゴールデングローブ賞など数多くの賞を獲得、アカデミー賞では作品賞など4部門にノミネートされていました。海外では評価の高さにもかかわらず、日本で

は大手映画会社が製作に関与しなかったためにアカデミー賞の前評判が高まるまで一般の映画館では見ることがほとんど出来ませんでした。小生は昨年7月の公開時に立川市のキノシネマで観ましたが、さすがに映画好きの選択眼は確かで狭い会場は満席でした。突然妻を病気で失った演出家が演劇祭での指導を続けながら送迎の運転手や演劇際の関係者との交流を通して生きる意志を取り戻していく物語です。西島秀俊と岡田将生の好演が印象的。良質な映画がなかなかおもうように映画館で鑑賞出来ない現実をもう少し何とかできないのかと改めて感じました。

▼「余命10年」は限られた命を懸命に生きる女性と彼女を愛したことで人生の意味を見出

されたのでありがたく鑑賞しました。三つのエピソードで構成されたオムニバス作品で、少し辛口で洒落た味わいの大人の映画でした。発掘し、上映してくれたシネマシティの担当者に感謝です。

▼城定秀夫監督、今泉力哉脚本の「愛なのに」は監督と脚本家が今後相互に入れ替わる約束をした第一作。さえない古書店主と恋心を抱く女子高生のやり取りに結婚間近だが相手に欲求不満の古書店主の元カノが割って入ってくる一風変わったラブコメディ。古書店主役の瀬戸康史と女子高生役の河合優美の自然な演技が爽やかな後味を残します。

▼「余命10年」は限られた命を懸命に生きる女性と彼女を愛したことで人生の意味を見出

▼アカデミー賞騒ぎの余波なのでしょう。同じ濱田竜介監督の旧作「偶然と想像」が上映した青年との10年を描きます。二人を演じた小松菜奈と坂口健太郎の感情過多にならない嫌みのない演技で定番のお涙頂戴に陥らずに済みました。

▼「世の中にたえて桜のなかりせば」は今年3月に急逝した宝田明が企画制作し主役も務めた遺作。不登校の女子高生がアルバイトしている終活アドバイザーの事務所を宝田明の演じる老人が訪れ、マニュアル棒読みの女子高生の助手に収まります。二人は女子高生の同級生の写真部員を手伝いに引き入れ、不思議な依頼を解決していきます。映画初主演の元・乃木坂46の岩本蓮加が宝田のサポートを得てまっすぐな主人公を生き生きと演じています。